
魔法先生ネギま！～屍の主～

なっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま～屍の主～

【Zコード】

Z3560P

【作者名】

なつちゃん

【あらすじ】

主人公が死んでネギまの世界に転生? 本来いない人物がいる事で 一体どんな風に話が変わつて行くのか、それは見てからのお楽しみ。

注意点（前書き）

この小説を読むための注意点

注意点

作者は話を考えるのが苦手なため、おかしな点やこじおかしいだら
など様

々な事があるので感想等で書いてもらえたと嬉しいです。

他にも色々御都合主義など文才がなくてもいいなら見てください

更新ペースは作者が気が向いたら書くので期待はしないで来だ

さい

作者はネギま！はハ巻屍姫はガンガンで途中から見ました、

好きなキャラは屍姫の北斗です

あとこの小説にこいつのつのがたりないなど感じた時も感想等で書いてもらえると嬉しいです

注意点（後書き）

頑張つてこられたいと思つます

第1話 プロローグ（前書き）

前回の投稿からどんな風に話を進めれば良いのか考えていて一週間
考えていたので遅れました。

今後も同じ様に遅れる場合があるので優しく見守ってください。

第1話 プロローグ

P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i

「うーん、もう朝なのか寝た気が全然しないなって此処どこーーー。」

自分の周りを見ても、床と天上の繋ぎ田がわからないくらい真っ白の場所にいた

「おはよーやつと起きたね、やつぱり下界の人間を起こすには田覚まし時計だね！あれで起きると田が覚めるし何より音のバリエーションが色々あるから良いよね。」

いきなり田の前に現れた青年みたいな男は田ぞまし時計のこと語つていた

「あなたは一体誰ですか？」

「ああ俺、まあ下界の人間からしてみたら神様かな。」

「へ？何でその神様が此処にいるの？」

「あ～そつか君はまだ自分の状況が解つてないか

「状況？」

「そうそう、さつき君は何で俺が此処にいるのかって聞いて来たけどそれは違うんだよね、正確には何で俺はこんなところに居るんで

すか?」だ。」

「えつじやあ此処はどうなんですか?」

「セツセツセツの言葉が聞きたかったのだよ。」

「は、はあ」

「反応が薄いな~そんなんじゃ」この先つまんないぞ~まあいいかじやあ早速、ここは君の様な人間やその他の生きているものがいた世界を管理する世界だよ!」

「え~とそれはつまりひみつだね~」

「まあ要するに此処に雨をたくさん降らせようとか、ここの人は良い人だから良い事が起きる様に幸せをあげたりだと世界の全ての事柄を操る世界だよ」

「えつなんで僕はそんなすごい世界にいるんですか?」

「実は君に関する人生の情報に誤りがあつて君が死んじやつたんだよね~」

「・・・え~~~~~!!僕もう死んでるんですか!」

「セツなんだよ、だから転生させるから此処に呼んでそれを教えよ~と思つて」

「転生つてあの輪廻転生の転生?」

「そりそり、まあ普通の転生は記憶」と初期化されるけど君の場合
は特別に記憶は消されないから安心してね、あと転生先はこっちが
勝手に決めてネギま！の世界にしたから」

「なんかドンドン話が進んでいくなってゆうか神様が何でネギま！
の事を知ってるんですか！」とゆづかネギま！は主人公のネギが麻帆
良にきて教師をするぐらにしか知らないし

「此処は世界を管理してるからそんな情報はあって当然原作知らな
くてもまあ関わる様にするから大丈夫」

「はあ、わかりましたもつ良いです」

「他には此処はあくまで世界を管理する世界だから記憶を残して転
生させるので精一杯でね君の能力とか潜在的力はほぼランダムだか
ら、まあ念のために君の記憶にあるキャラクターを君の力になる様
に送るから」

「ちなみにそのキャラは誰ですか」

「それは見てからの・お・た・の・し・み・それじゃあ逝くよ

「逝くよの字違つませんかそれにびりりつて？」

「ヤ」「そりゃあこいつして」パチン

「何で下に穴が～～～！」

「こつてらつしゃ～～」

第1話 プロローグ（後書き）

今日暇で自分の小説の情報を確認し既に5件もお気に入りに入つておりとても焦つて投稿しました。

既に前回の注意書きの所で書き方に指摘があり頑張りました。

作者が成長する様にこの調子でドンドンダメな点を書いてください。

ステータス的な物（前書き）

このステータス欄は話が進むにつれて更新する予定です。

* 更新 12 / 31 11 : 22

ステータス的な物

ちょっとFate風にしてみましたw

名前：一之瀬翔いちのせ しょう

容姿：髪と目は漆黒で髪の長さは腰の辺りまで伸びているストレートのロング、呪いのせい体が弱く余り外に出なかつたので筋肉は付いておらず肌も白い、見た目も男よりもどちらかと言えば女に近い。

身長：126cm

体重：32キロ

属性：善

筋力：D (S) · ? 魔力：S

耐久：E (EX) 俊敏：D (S)

幸運：F · ? ? ? 宝具：A

保有スキル

呪いの子：A

代々一之瀬の家系で稀に生まれる子で、常に呪われている体质で、呪に呑まれて短命である。

呪の才：A

子供の頃から呪術を血反吐を吐く思いで修行したため、今では体に掛かる呪を抑える事に成功し、長生きが出来る様になった。

呪の解除：B

初めて見た呪も、時間と必要な物さえあれば、必ず解ける。

呪いの転移：A

他人の呪いなどを他の人物に移し替える技術

陰陽術：C

陰陽術を使える用になるスキル呪の勉強ばかりしていて余り陰陽術は上手くない。

呪の同調：B

自分の任意で呪を自分の体に馴染ませるもの、使つたあと呪の強さで一時的に後遺症を出す。

宝具

名前：呪包刀じゅほうとう

ランク：A

種別：対人

レンジ：1

最大補足：1

? 能力：刀を鞘から抜くには呪に掛かっていないと無理で、刀を鞘から抜くと力を發揮し、刀が吸う魔力に比例して持ち主に掛けている呪を吸う、そしてその吸った呪をその刀に付属させる事が出来る。

例

抜いている間は、超人的な力と技術、など

名前：北斗

ほくと

容姿：屍姫の北斗をそのまま小さくした容姿で、まだ子供なので胸は平原状態。

身長122cm

体重30キロ

属性：混沌

筋力：EX ? 魔力：D

耐久：EX ? 俊敏：EX

幸運：E ? 宝具：EX

宝具

名前：未練と妄執

ランク：EX

種別：対人

レンジ：1

最大補足：1

能力：屍姫と同じ様に、人の本質を見抜く事ができる、他には吸血鬼並の再生力がある

ステータス的な物（後書き）

ステータスでも良いから連続投稿しようとしたけど書いてる内に日付が変わってしまっていた作者です。w

今回はFat e風に主人公のステータスが書きたいなーと思いついで書きました。

この後の2話はなるべく早く書こうと思っているので応援おねがいします！

第2話 転生（前書き）

読みにくくこと思こますががんばって書きました。
誤字などがあつたら報告おねがいします！

第2話 転生

「んにちは！ 一之瀬翔いちのせ しょうです。

僕が生まれた家庭は関西呪術協会と言つ物に組しているらしく、それなりの地位を持っているらしい、家族構成は父母兄と自分の4人家族で、家も家と言うよりも屋敷に近く、父の趣味なのか巫女服姿の人達が毎日働いている。そして生まれてから早6年いろいろな事があつた。

最初は生まれつき体が弱く余り外で遊ばしてもらえない事だつた、前世の記憶では子供の頃は元気に遊んでいたのでその分虚しかつた、隠れて外に出ようとしても巫女人達に捕まり部屋の中の布団に寝かされるしまつ。

他には自分は呪の子と言われる物で、一族に稀に生まれてくる子らしくあまり良い話がないらしい、常に呪われている子だとか、呪に呑まれて早く死んでしまう短命の子だとか。

なぜそんな事を知っているかと云つと、3歳の頃に陰陽術の修行を始めた時に異様にスバルタ氣味に教えられるので何かおかしいと思ひ父に聞いて見たら、自分は呪の子だと教えてくれた。

父の話を聞いて目の前が真っ暗になつた気がした、自分はまだこの世界で何もしていないし、自分を産んで育ててくれた父母に恩返しすらしていないのに死ぬという事、しかし父の話によれば、昔呪の子の中でとても呪術に優れた人が長生きしているらしく呪を制御出来れば長生きが出来る という事だ、その話の後に父に今まで以上に修行がしたいと言つた。

最初は陰陽術の基礎を学び、次に呪術の知識を詰め込み、今度は実際に物に対して呪を掛け自分実力を付け、最後には自分に呪を掛けてもらい呪に対する耐性を付け血反吐を吐く勢いで修行した、前世でも味わった事の無い苦しみで実際に血も吐いた、そんな修行をしている内に今では関西一の呪術使いといわれるまでになつた。

今までの話を聞いている分にはこれなんてチートとか思うけれど實際は、体は少しばかり運動ができる様になつたが呪いのせいで体は弱く、呪術ばかり修行していたので陰陽術も基礎中の基礎しか出来ず、1人では雑魚妖怪を足止めするのが精一杯と言う貧弱ぶりだ、まあ呪術に関してはチートなので呪関係の仕事しか僕には来ない。

そして今日はなんと関西呪術協会の本山からの仕事らしく今は車で移動中です。

「父さん今日の仕事ってどんな事をするの？」

「なんでも本山の蔵の中から出てきた刀の呪をどんな物か見て欲しいそうだ」

「あれ？ それぐらいなら他の人でも簡単に出来ると思うんだけど？」

「ああ、しかし本山の者に調べさせたがどんな呪が掛かっているのか分からぬそうだ、唯一わかる事は特定人物しか鞘からむ抜けないらしい、そこでお前の出番だ」

「しかし刀の呪を調べるのは自分の部屋でするのに刀を借りてくるのになぜ僕まで行くのですか？」

「実は関西呪術協会の会長の近衛詠春様にはお前と同じ年の娘さんがいてな、本山では余り遊び相手がいないらしく遊んでくれないかとの事だ」

「はあ・・・」

「まあ本山に付いたら挨拶をしてその刀を受け取った後に永春様の娘さんと遊べば良いだけだ、お前も毎日修行していたからな、少しは子供らしく無邪気に遊べ」

父は微笑みながら僕の頭を力強く撫でた、父は良く頭を撫でてくれる流石に前生の記憶があり恥ずかしくもあるが父になでられるのは大好きだった。

本山に付くと巫女服姿の人達に広間に通され少し待つていると奥から眼鏡を掛けた温和そうな人が来た。

「初めてまして関西呪術協会会長の近衛詠春です」

「初めてまして僕の名前は一之瀬翔いちのせじょうです今回蔵から出てきた刀を調べるために預かりに参りました」

「では早速刀を持って来させますね、すみませんあの刀を持って来てください」

永春様が刀を持って来てくれと言つたら襖を開けて巫女の人人が刀を持つて入つて来て自分の前に置いた。

「それは蔵の奥からでて来た物で誰が何時作ったのか分からん
ですよ、それに禍々しい程の呪なのにその刀を持つても何も起こら
ない、本山の中では手の出し用がないので貴方を関西一の呪術師と
見込んで呪を調べて見てくれませんか？」

「はい！未熟な身ですが精一杯やらして頂きたいと思します。」

「ありがとうございます御座います、じゃあ少し君の父と話をするのでその間
私の娘と遊んでいてくれませんか？」

「はい！」

「すみません、翔君を木乃香の所へつれていってくれませんか？」

「わかりました、それでは翔様」こちらへ

永春様が刀を持って入つて来た巫女の人には案内をたのみ自分はその
巫女の後に続いた。巫女の人に付いて行くと広い庭に出た、庭
の中心辺りには2人の女の子が居て自分の存在にきずきこちらを見
て笑顔でもう1人の子を引っ張つてきた

「ねえねえ一緒にあそばへん~」

それが彼女近衛木乃香と桜咲刹那との初めての出会いだった。

第2話 転生（後書き）

「これからもいろんな感じで行きたいと思っています。
よろしくね！」

第3話 初めての原作キャラ（前書き）

ちなみに一之瀬翔は登場キャラが誰なのか覚えていません（呪術の修行が忙しすぎて忘れたと言つ事で）

*修正しました！12/30

毒舌家さん御指摘ありがとうございました。

第3話 初めての原作キャラ

「ねえねえいつしょにあそばへん~」

和服姿で髪は黒く腰まで伸びている女の子がいきなり遊びに誘つてきた。

「IJのかちやん、したいめんのひととあこせつせな

IJのかちやんと呼ばれる女の子に手を引かれて来た胴着姿の女の子が、少し焦りながら初対面の人とは挨拶しないことと言つた。

「わうやなーうひむ、IJのかつてここまつりーようじゅうな、ほらーせつちやんも

IJのかちやんが、胴着姿の女の子の背中を押して自分の前に持つて來た。

「あ、えっと、せつなです、やべりやせつなです」---

せつなちやんは、恥ずかしいのか顔を赤くして少し俯いて挨拶した。

「僕はー之瀬翔ですよろしくー、IJのかちやんーせつなちやんー」

僕がこのかちやんとせつなちやんの名前を呼ぶとこのかちやんは田をキラキラ輝かせ、せつなちやんはさらに顔を赤くして俯いた。

「よろしくねーしょーくんーそれじゃあさつやあそばへん?」

「うん！遊ぼっか

そして僕とこのかちやんとせつなちやんの3人で時間を忘れるぐら
い遊んだ。

「それでは詠春様、木乃香様、私たちはこれで」

夕方になると父と詠春様がやって来て父が帰ると言った

「しょうくんまたあそぼうなー」

「じょりくんまたこんどな」

このかちやんは眠たいのか少し目を擦ついて、せつなちやんは最初は少し緊張して喋つていたが、遊んでいる内に段々と緊張が溶けて行き今では碎けて喋る事ができる様になつた。

「私からもお願いします。」

「はい！次来た時も一緒に遊びたいと思います」

「それはそれは、君が次くる時が楽しみですね。」

そうして次に来た時も一緒に遊ぶ約束をして父と一緒に帰つた。

帰りの車の中で父に今田の遊んだ時の話をした。

「今日は楽しかったか？」

「はいー・今日は同じ年の子と始めて遊んでとても楽しかったです。」

「そう言えばお前に言つておかないといけない事があるんだ。」

「言わなければならぬ事とは?..」

「今言つのは遅いのだが詠春様は木乃香様に裏の事を隠して育てる
らしくてな、木乃香様には裏の事はばれない様に接して欲しいんだ」

「はいわかりました父さん」

「そう言えば今日渡してもらつた刀はどうだ?..」

「一目見ても普通の刀の様に見えましたが鞘の隙間から禍々しい程
の呪が溢れました。やはり特定の人物にしか鞘から抜く事は出来
ず、抜いた時に発動するタイプの物だと思います。」

「さすが翔だな一目見ただけでそこまで判るとは」

「しかし父さんあの刀に一体どんな呪が掛かっているのが見当がつかません、あれぐらいの禍々しい程の呪が刀に掛けているのに刀を持つても何も起こらないなんてひょっと興味を引きますね」

「そうか、まあ興味を引かれるのはわかるが余り無茶をするなよ」

「はいー父さん」

その後家に帰った後に家族と一緒に夕飯を食べその後に風呂に入り、つくり入って自分の部屋に入った

既に自分の部屋の中にはあの刀が机の上にあった

「それじゃあやりますか」

～～～1時間後～～～

「あ～もうダメだ、何だこの刀の呪禍々しい呪なのに全然体に影響が無いとかどんな呪なんだ？」

うん少しだけ鞘から抜けるか試してみるか？あつでもその前に念のために解呪用の道具を用意しておいて。

それじゃあいきます！

シャ～～

「あれ以外どうへん、うつやば」

チャキン

「危な！」

刀を鞘から抜いた途端に自分の体から魔力などじつそり持つていかれビックリしそくに刀を鞘に納めた。

体に変な事起つてないかな？一用調べとこうかな？はあ？なんでこんなに呪が軽くなつてんの、もしかしてこの刀が魔力とか呪を吸収したのか？たしかに今まで吸つてきた呪が溜まつたんならこの禍々しさも頷けるしな。

まあ今は魔力をたくさん吸収されて疲れたから明日にしよう。

そして僕の原作キャラとの初めての出会いは終わった。

第3話 初めての原作キャラ（後書き）

あいりさん感想ありがとう御座いました。

御指摘の部分は修正しました。ありがとうございました！

第4話 神様との再会（前書き）

自分は今回は少し強引だった気がする～！

* 12 / 30 7 : 12

あいさん報告ありがとうございました御座いました

第4話 神様との再会

P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i

「もう朝なのか、全然ね「アニヨハセヨ~~~~!」またあなたですか。」

「いやあ、久しぶり! 6年8ヶ月と13日ぶりだね~~

「細かいですよ神様、まあ久しぶりです。しかし神様は、この世界には干渉出来ないはずでは?」

「そりそりそれ! そのフリを待っていたんだよ! 君は空気が読めるね!」

「神様のそのテンションの高さもお変わりなく。」

「まあその話は置いといて、まあ干渉する気は無かつたんだけどね、君を生まれてから見てたんだけね~、少しだけ教えておこうかなつと思つて。」

「何をですか?」

「何をつて、君が抜いたあのまか不思議な刀の事だよ!」

「あの刀の事ですか? あれつて一体どんな刀なんですか? 自分には見当がつきません。」

「はつはつは～！やはり君でも分からなかつたか！まああれば君の専門外だからね。」

「専門外？あの呪を帯びているのに？」

「まあまではあの刀の事を話さないと、あの刀は呪包刀じゅぱうとうと呼ばれる物で本来呪を帯びていなかつたんだよ。」

「えつでもあの刀は呪を帯びてい「まあまあ、最後まで聞いて。」
はい・・・」

「それでね、あの刀を抜くにはね、呪が掛かっている者にしか扱えないんだよ、そして刀を鞘から抜くと魔力を吸収してその魔力に比例して呪を所持者から吸うんだ、そしてその吸つた呪を、その刀に付属させる事が出来るんだ。まあ呪の吸いすぎで、本来の力を発揮出来て無いけどね。」

「どうしてですか？」

「例えば、キャンバスの上に水性の絵の具で絵を書くでしょ、一つの絵ではどんな絵なのかわかるけど、それを何回も何十回も塗りつぶして行けば、最終的にはどんな絵なのか分からなくなるのと同じや、いろんな呪を吸収している内にどんな呪の効果なのか分からなくななるなつただけだよ。」

「それじゃあ使えないんじゃ？」

「大丈夫！大丈夫！呪は君の専門でしょ！その刀に吸収されている、ごちゃごちゃになつた呪を一つの大きな呪に君が変換すれば良いんだよ！」

「だけどあの刀は詠春様に掛かっているもので、結局は返さないと
いけないぞ?」

「大丈夫!大丈夫!俺が何とかするから!」

「わかったよ、神様の言葉を信じて詠春様にあの刀を貰えるか聞い
てみるよ。」

「そうだよ素直になれば良いんだよ!君は呪しか力がないんだから
!それともう一つ君に伝える事があるんだよ。」

「伝える事?どんな事ですか?」

「まじ、君が転生させる時に、君の力になる子を送るって言つたじ
や無い?」

「はい、僕の記憶の中にあるキャラクターですよね?」

「まあその子なんだけどね、そろそろ君の所に来るから楽しみにして
いてね。」

「まあ、神様が言つんだからとつても楽しみにしていますね。」

「よし!これで君に伝える事は無いからな、そろそろ起きるし、こ
こらでお別れだ!」

「はい」

「じゃあ、君の事はいつでも見てるから、がんばってね~。」

神様の言葉を聞いて僕の目の前が段々と真っ黒く染まって行つた。
』

第4話 神様との再会（後書き）

今回でステータスの方を、更新、修正しました。
暇があったらみてね～

第5話 報告ー（前書き）

がんばつて2連続で書いて見ました

第5話 報告一

「翔様、起きて下さい」

「んあ、・・・おはよハヤセコモス。あれ?どうしたんですか?」

「こつも起きられない時間になつても、翔様が起きて来られなかつたので、起きていて来てくれと頼まれまつて。」

「へへ、今何時ですか?」

「只今は、7時25分です」

「うふと寝あけましたね」

「翔様、昨日の刀に、たくさん魔力を吸われ過ぎたせいかな。」

「翔様、そろそろ朝食の御時間ですが。」

「あつまー、今こきます」

「おはよハヤセコモス、父セセ、母セセ、兄セセ、遅れですみません。」

「おはよう翔、昨日遅くまで起きてるから早く起きれないんだぞ。」

「まあまあ洋一そんな事言わんと、でも翔も早く寝ないと。」

「おはよう翔、ご飯を食べるから早く座りなさい。」

「はい父さん。」

そのまま家族と楽しく朝食を取り、兄が高校へ行つた。そして昨日の夢で刀の力を把握した事を、神様の事は話さない様にして、言った。

「呪包刀か・・・翔はその刀の扱い方がわかるのか?」

「はい！昨日試しに刀を鞘から抜いて見たら、魔力と呪を吸われまして、その後寝た時に夢で見ました。」

「どうか、まあ一用詠春様に報告するが、また今度行く時には翔がちゃんと報告しないといけないぞ。」

「はい！他にも何かないのかあの刀を調べて見ますね！」

「ここにまけたま、詠春様、木乃香様、今日せの前報告した事についての詳細を報告してきました。」

「じょりへそ、はやくこっしょてあるべきへ

「木乃香、少し翔君とお話をがあるので、刹那君と遊んで待つてくれないかな？」

「えへへ、それじゃあ、おとへても、はやくおはなしをおわらしてな。」

このかちやんは僕と遊べないのが不満らしく頬を膨らませて言った。

「じょりへそ、あつちのひうぜであそんでるかい、はよきてな～」

そう言つたのかちやんは、今まで空氣だつたせつなひやんを引つ張つて行つた。

「それじゃあ早く終わらせますか、では此方で。」

詠春様に続いて一つの部屋に入つて向かって畳つ様に座つた。

「それでは、報告御願いします。」

「はい～え～と、あの刀の名前は呪包刀と呼ばれる物で、呪をその身に宿していないと抜けない物らしく、抜いた瞬間に持ち主の魔力を吸い、その魔力に比例して呪を吸うのです、そしてその吸った呪を刀に付属させる事が出来るらしいです。」

「やつですか」苦労をまです。しかしこんな短期間で呪はあるか刀の名前までわかるとは。」

「いえ、実は少し刀に興味を持ちまして、試しに刀を抜いて見たら抵抗もなく抜けて、その日の夢でこの刀の名前と力を見たんです。」

「なるほど、それは興味深い。」

「それと、実は詠春様に頼みたい事があります。」

「何ですか？頼みたい事は？」

「はい、実はあの刀を譲って欲しいのです。」

「あの刀ですか・・・」

詠春様は目を瞑つて少し考えた後に答えた。

「良いでしょう、扱える者が居るのに、使わないなんてもったい無いですからね。」

「ありがとうございます！」

「それじゃあ報告も終わった事ですし、木乃香達の所に遊びに行つて下さい。」

「はい！失礼しました。」

その後は前回と同じ様にこのかちゃんとせつなちゃんと帰るまで遊んだ。

第5話 報告一（後書き）

もう少しで新年ですが、まだまだ書く気持ちはあるので楽しみにしていて下さい。

第6話 初めての剣術（前書き）

話の展開が早い気が・・・

第6話 初めての剣術

どうも、一之瀬翔です。呪包刀を譲つて貰つてから約2ヶ月、僕は今道場の真ん中でぶつ倒れています。どうしてぶつ倒れて居るかと言つと、あれは呪包刀を譲つて貰つて家に帰った時に、さかのぼる。

一ヶ月前

翔ちよりど良い?

「せこゆさん、どうしたんですか？」

「健示さんに、詠春様に刀を譲つて貰つたて聞いてね」

ちなみに健二さんは、父親のじいだ。

「それでどうしたんですか？母さん」

「いやね、せっかく刀を持っているんだつたら、
神鳴流習わない？」

「神鳴流ですか？」

たしかに、刀の力で全体的な能力を上げても、刀も扱った事のない
んじや 宝の持ち腐れだしな。

「はい！ 習つて見たいです。」

「じゃあ早速道場へゴー！」

「えー？ 母さんだれが神鳴流で誰が教えるんですか？」

「それはね、お母さんが直接教えてあげるよー。」

「母さんて神鳴流が出来るんですか？」

「母さんは毎日やつたりと過い」して、流石に神鳴流なんて、扱えないこと思ついたし。

「も～翔ちゃんたら、お母さんがそんなに信じられないの？ 流石に斬魔剣 弐の太刀とかは無理だけど、大抵は使えるよ。」

「お母さんってお父さんと結婚するまでどんな事してたんですか？」

「ん～色々あつたけど、太刀を持つて妖怪相手にブイブイ言わせていたのよ～」

「じゃあお母さん御指南お願ひします。」「

「ようしごーちなみに修行中は歸丘と呼ばなことだめだよー、それじゃあ早速道場行くわよ～」

「はーーー母さん」



そして母の修行が始まつてみれば、母は飴と鞭の扱いがうまく、自分の限界ギリギリまで修行し休憩を何回も繰り返した。

普通は木刀などで型を繰り返し体に馴染ませるのだが、荒技で呪包刀の力で、呪を少し弄くり鞘から抜いている間だけ、達人クラスの腕にする様にして型を繰り返し、体に馴染ませた。

ちなみに呪包刀に吸わせる魔力を増やせば呪包刀の力をたくさん引き出せる事が分かった。そして呪包刀の使用可能時間が最小限で30分最大出力で5分と確認出来た。

そして現在魔力と体力切れで道場の真ん中でぶつ倒れています。

「翔ちゃん健二さん後でくる様にだつて。」

「はい・・・わかり・・・ました」

-----父の書斎-----

「父さん何か用ですか？」

「ああ実は少青寺に呪を封印している場所があるんだけどね、最近封印が脆くなつて来て翔にやってもらいたいって依頼が来てるんだよ。」

「どんな封印ですか？」

「古すぎて分からないから、向こうでどんな封印が効くのか調べて封印して欲しいんだ。」

「それは難しい事を、何日か向こうで泊まると思いますが良いですか？」

「大丈夫だよ、出発は明日だから早く寝なさい。」

「はい父さん、失礼します」

そして僕は明日の依頼のためにいつもより早く寝た。

第6話 初めての剣術（後書き）

ついで次回お助けキャラ登場です！楽しみにね

第7話 お助けキャラ?（前書き）

今回で神様が主人公の力になると書いたキャラが登場です。ちなみに作者はそのキャラが好きです。

第7話 お助けキャラ?

「こんにちは！一之瀬翔です。僕は今、昨日父さんが言っていた、少青寺に居ます。そして現在進行系で、その呪が封印されている場所に向かっています。

「すみませんね、わざわざ遠い所から。」

「いえいえ、これも修行だと思って、精一杯やらして頂きます。」

「いや～、若いのにしっかりしてますね。・・・と此処ですね、今回依頼した封印して欲しい場所は此処なんですが。」

案内人に連れられてやつて来た場所は、少青寺の裏の山にある洞窟の中での前には、頑丈そうな少し鎧びた鉄の扉があつた。扉の至る所には、古ぼけて所々文字が読めなくなつた、呪符が貼つてあつた。

（しかし、一番凄いのが、こんなに大量に呪符が貼られているのに、扉の隙間から流れ出る禍々しい気配、呪包刀が持つてゐる、呪をも凌駕する禍々しさ、一体どんなのが封印されているのか、想像する事すら出来ない。）

「すみません、此処に封印されている物つて一体どんな物ですか？」

「え～と、寺にある文献に書かれていたんですが。曰く、存在自体が呪いの様な物らしく、日本中の陰陽術師を集めて、やつと封印できたらしい、と。」

「そんな物を一人で封印できますか！」

「いえ、100年前は一人で封印を掛け直した記録がありますので、なんとか出来ると思いまして……」

「…………まあ全力でやらして貰います。呪符は古くなりすぎてどんな風に封印したのか分からないので、現在の封印に、せりこんで封印します。」

そう言つて僕は、洞窟を戻つた。

「あれ？ 封印しないんですか？」

「流石に初めての見た封印で、同じ封印が出来ないので、自分が使える中で、どれが効くか調べるために、一旦戻ります。」

「あつそうですね。じゃあ戻りますね。」

そして僕はどんな封印が効くのか考えながら帰つた。

あれから一日、僕は自分が泊まる寺の縁側で、お菓子を食べながら、どんな封印が効くのか考え中だ。

「ん~、これじゃあ効果が無いし。こっちじゃこんなに封印したら、自分の魔力が足りないし。それならこっそ新しく一からつくるか、頑張れば今日中にできるか？」

「頑張れば今日中にできるか？」と、此処の魔力運用率と抵抗率をなるべく少なくして使用魔力を減らして……

じ――――

「此処をいつしても……」

じ――――

「えへ～と、ここを……あの～気が散るんで見ないでくれま……せん・・・か・・・」

新しい封印の術式を考えていたら、前方から物凄い視線を感じて、止めて欲しいと言おうとして顔を上げると、なななんなんと屍姫の北斗が居るじゃないか。

第7話 お助けキャラ? (後書き)

年越し前に投稿する事が出来ました。少し怠^{だら}かれて雑になつたかもしませんけども、楽しんでくれてたら幸いです。

アンケート実施

あけましておめでとうございます！新年で心機一転したいと思つので、何個かアンケートを実施します。

1、やつぱり「」の前に人の名前いれたほうがいいですか？

2、～～ saidみたいに入れた方が良いですか。

3、もう少し描写をいれたほうがいいですか？

4、やっぱり木乃香や刹那の恋愛はありだよね。

文字数の関係で少し雑談です。

しかし此処まで、お気に入りにしてもうえるとは思いませんでした。
お気に入り37

週間アクセス2103

他の所と比べると、少ないかもしませんが、作者にとつてはとても嬉しいです。

これからもお気に入り数、週間アクセス数が、増える様に頑張つて

行きたいです。

いや～しかし、北斗が可愛いよ～、あの無邪気な行動がいいよね。

第8話 懐かれた？（前書き）

前回から遅れてすいません！

少し話の構成をどうするかで迷ってしまいました。

今まで見て来た様に御都合主義ばかりですが、楽しんで見て下さい
！

第8話 懐かれた？

「こんにちは！—之瀬翔です。現在僕は屍姫の北斗と一緒に布団で寝ています。何で一緒に寝てるのかと言つと、あれは北斗と出会った時に戻ります。

~~~~~

（なななんで北斗が此処にいるんだ！北斗は確か屍姫の世界のはずだろ！どうしてこんな所にい・・・神様か～！確かに北斗は好きなキャラだけどいきなり過ぎないか？）

少しの間心の中で、そんな事を考えてふと北斗を見る。屍姫では左目から頬にかけて北斗七星の徵を宿していて、裾と袖口が朽ちた巫女装束に身を包んでいたが、今は着ているものは同じだが、身長が自分よりも少し小さく、体も身長に合わせてスレンダーになっていて、おまけに北斗七星の徵を宿していない。

そのまますっと北斗を観察していると、北斗が手を伸ばしてきて僕の頬を触ってきた。

最初は片手で触れるか触れないかの位で触っていたが、段々と触れる面積が増え最後には両手で挟んで覗き込んできた。

最初はいきなりの登場で脳がフリーズしていたが、頬を触られていくうちに、脳の起動が出来た。

「あの～少し頬を触るのを止めてくれませんか」

「・・・？」

北斗は僕の言葉が分かつたのか、コテンと音がなる様な仕草で頭を傾け頬を触るのを止めた。ちなみに翔は北斗が頭を傾けた仕草を見て少し可愛いと思つた。

「貴方に聞きたい事があるんですが、美味しいお菓子などありますけど？」

「・・・おいしい？」

北斗はなんの意味なのか理解していないのか、頭を傾けながら言った。

(うーん、屍姫の様に知識が全然ないのか?)

そんな事を考えながらびつすれば美味しいの意味が伝わるのか考えた。

「えーと、おいしいって言ひのは、食べると幸せになる事なんだよ。」

「・・・幸せ？」

「幸せはね自分の体が満たされて行く事なんだよ。」

「・・・満たされる？」

「例えば、誰かとお話ししたり、誰かと一緒にご飯を食べたり、誰かと一緒に眠つたり、後は好きな人と一緒の過したりとか?」

「・・・お話し?」

僕が隣に座る様に催促すると、北斗が隣に座った。その後は色々な話をしたり、一緒に折り紙などで遊んだりして夜まで時間を潰した。

今より「餌を一緒に味わう」と食べ方へ

箸の持方か違ひよ  
はなこりへ持て

[ 1 ]

北斗は今まで箸を使った事がないのか、箸を片手で握り締めて食べようとしていた。

(やつぱり箸の持ち方はすぐには無理か。)

一 ほら口を開けて

箸の持ち方が分からぬ北斗に、飯を食べさせた。その後も一緒にお風呂に入り、一緒に寝た。

今日一日中、北斗と過して北斗が全然知識が無い子供の様な存在と言う事が分かつた。今からちゃんと常識を教えれば屍姫の様に人を殺さなくなると思った。

~~~~~

その後封印されていたのが北斗と分かつたが、父さんと母さんに頼み、監視と言う建前で北斗を養子にとつた。

それからは北斗に常識等を教えて、一緒に過して行つた。一緒に勉強したり、一緒に風呂に入つたり、一緒にご飯を食べたりほとんどを北斗と過ごす様になつた。

第8話 懐かれた？（後書き）

「こんにちは、なっちゃんです。
いや～前回のアンケートの返事を見たけど、以外に受けてるんですね～

前回のアンケートで、北斗もヒロインですよねって帰つてきました
が、無論そのつもりです。

他にも一人考へてるんですか、よく考へたらハーレムになつてね！
といひつと悩んでるこの頃。

まあそんな事は考へずに、自分が行きたい道を行くので、生暖かい
田で見守つて下さい。

第9話 パートナー（前書き）

キャラ崩壊あるかも知れません。

第9話 パートナー

こんにちは、
一之瀬翔です。

現在僕は式神を元還しよ」と奮闘しています

「ほら、翔ちゃんもう一回ー！」

母さんが今日何度も聞いた言葉を言った。

卷之三

- 1 -

そして母さんの掛け声と共に式神召還の呪文を唱えた。

A 10x10 grid of black dots, arranged in 10 rows and 10 columns, centered on a white background.

「やつぱり召還が出来ないのね」

母さんが今日数十回目の式神召還の失敗で少し落ち込んで言った。

「 . . . はい」

「可能性としてはやつぱり翔君の呪のせいかな。 . . . ん
「そうなると . . . 前鬼ぜんきと後鬼ひきが出せないから翔ちゃんは神鳴流の
人に護衛を頼むかしら . . . そつだ！ 北斗ちゃんに翔ちゃん
の護衛を頼みましょー！」

母さんが一人で色々と喋った後、いきなり北斗を自分の護衛をさせ
ようと提案を出した。

「えー！ 母さん！？」

「大丈夫よ北斗ちゃん意外と強いし、翔ちゃんにずっと一緒に居る
から護衛にはもってこいよ」

確かに北斗の戦闘能力は物凄かった。

最初は母さんがどれぐらい強いか確認する為に、屋敷の神鳴流の人
と試合をさせたとこ、一撃で沈めてしまった。

やはり屍姫の様に凄い怪力と戦闘センスを持っていた。

最初は何も知らない子供の様だったけど、常識を教え続けた事で、
今では屍姫の様な性格ではなくなったので、護衛をさせるには丁度
いいだろう。

「あの . . . 母さん、流石に北斗のいない所で勝手に話を進
めたら . . . 」

「じゃあ今から北斗ちゃん呼ぶから2人で話し合つてね。北斗ちゃ
ん入ってきて」

「えー・ちよつ・ゆでー。」

「はい」

母さんの呼ぶ声に答える様に北斗が部屋に入つて来た。

「それじゃあ後の話は翔ちゃんに任せることにするから、2人でゆっくり話し合つてね～」

アーヴィングは、彼女を心から愛していた。

「何でうるさい？」

「実は北斗に頼みたい事があつてね」

一
頼
み
た
い
事
?

北斗は頭をコテシと横に傾けた。

一
文
部
書
記

少年説明中

・・・てな感じで、北斗に守つて貰いたいんだけど」

卷之三

守つて貰いたいと北斗に頼むと、北斗はすぐに返事をした。

「じゃあ」れからよのへ北斗。」

第9話 パートナー（後書き）

前回の投稿から時間が掛かったのにもものすごい短いし。

第10話 初めての（前書き）

やつてしまつたが後悔はしていない。

第10話 初めての

「うわ、これは、一之瀬翔です。」

現在僕は西洋魔法の勉強中です。

何故陰陽術を使う僕が西洋魔法を勉強しているのかと言うと、前衛で戦う北斗と後衛で支援する戦い方が西洋魔法の魔法使いと従者の関係に似ており、西洋魔法の従者に魔力を供給する事の出来るパクティイナーの術式を真似して擬似的に縁を繋げ、北斗に靈気を供給する術式を作る為である。

靈気を北斗に供給する事ができれば、戦闘能力の上昇と物凄い回復能力が手に入る計算だ。

「しかし、西洋魔法も意外と使えるな。この術式とか陰陽術に組み込めばより少ない魔力で高出力だもんな。まあまずは靈氣を北斗に供給する術式を作らないと」

あれは「レーヴ」と、これが「レーヴ」で、此處と此處を繋いで・・・

A square grid of 100 black dots, arranged in a perfect 10 by 10 pattern. The dots are evenly spaced both horizontally and vertically, creating a uniform grid across the entire area.

「ん～～、大体は完成したかな。意外にパクティオーの術式が複雑だから時間掛かつたな～」

「．．．翔」

「つひやーほ、ほくとーいつから後ろにいたのー！」

いきなり後ろから声を掛けられ、今まで出した事が無い様な声を上げてしまった。

「しようが一人でぶつぶつしゃべり始めた頃から」

北斗が言つには術式を考え始めた頃からずっと後ろで見ていたそうだ。
(と言つてから独り言をずっと北斗に聞かれてたの！恥ずかしい！今まで一生の不覚)

「それで北斗は僕にどんな用があるの？」

独り言を聞かれた事を頭の隅に寄せて北斗に用事があるか聞いて見た。

「うそ、 狂うに用事が有つて来た」

そう言つと北斗が目の前までやつて来て・・・・・・

「えいー。」

思いつきり押し倒された。

「…………へ？ あ、 北斗ー 一体どうしたのー。」

「へしょりとキスする為？」

北斗は僕の言つて居る意味がおかしいかの様に言つた。

「ふ、 普通はキスなんでしないよ！」

「？ しょりの母さん」パートナーはキスしてなる物だつて言つて
いたよ

おか～～～ ゃん！ なんて事北斗に吹き込んでるんですか！ 北斗本氣
でキスするつもりですかよー。

「ちゅーー 北斗ちゃん 少しま むぐり？ー」

北斗の行動を止めようと手を出した瞬間に北斗の歯で僕の口を塞が
れた。

「…………へりゅ………… りゅ………… りゅ…………

「 ツーー。」

考える暇もなく歯を割つて北斗の舌が侵入してきた、慌てて舌で押
し返そうとしても器用に舌を絡めてきて口の中を蹂躪して行く。

「…………ふむつあ、 はあ、 はは、 ほくと、 ちゅうとまシーー。」

苦しきなつたのか北斗が唇を離した隙に止めて欲しこと呟おつとす

るが、喋っている途中でまた口を塞がれる。

口を塞がれているせいで段々と酸素が頭に回らなくなり、この状況を何とか脱出しようと押し返そうにも北斗の方が力が強いため逆に押さえ付けられ、唇を離して息をしてまた口を塞ぐ行為を繰り返した。

「……………あひへ……………あひへ……………あひへ……………あひへ……………」

「んっ！……………んんっ！……………んっ……………！」

段々と北斗の舌の動きが激しくなつて口の中を激しく舐め回す。

前世でもテイ一ープキスは初めてで、キスの快感で何にも考えられなくなる。

「……………あひへ……………あひへ……………あひへ……………あひへ……………」

北斗が唇を舐めると僕の唇と北斗の唇を透明な唾液の橋が掛かっていてとても旨味的だった。

「これでじょいのパートナー」

やつぱりと北斗は僕の上から立ち上ると何処かへ行つた。

「はあ、はあ、はあ

北斗が去つてから呼吸を整え立とうとするが、足元がおぼつかず中々立ち上がる事が出来なかつた。

結局そのまま口に向かうが起きたまま、口を過してしまった。

~~~~~

「はあ～～

布団に入つて隣で寝てゐる北斗を見ながらため息をついた。

（…………北斗意外にキス上手だったな～、はっ？！何考えてるんだ僕！でももう一回ぐらい良いかな～）

北斗ともう一度キスをしても良いかもと思いながらもインパクトのある一日は終わった。

～～おまけ～～

「北斗ひかる！パートナーになるにはキスをするんだよー！」

「キス？」

「そう！キス！まずは押し倒してから翔ひかるの口の中に舌を入れて口の中を舐め回すんだよ。その後は息継ぎしながら翔ひかるの抵抗が無くなるまでキスを繰り返すのよー！」

「？はー」

「意外に翔ひかるだと思つかないでさーってねー！」

「じゃあ早速キスしてさー！」

「行つてらっしゃい  
るのも早いかもね」  
・・・・。  
ふふふこのまま行けば孫を見

## 第10話 初めての（後書き）

初めてこんなシーンを書いたのでうまく書けたのか微妙です。  
といふか母親暗躍w

外伝 北斗が来る前の話（前書き）

今回はあまり話の進行に関係無い物を書いてみました！

## 外伝 北斗が来る前の話

今日は久しぶりに木乃香ちゃんと刹那ちゃんと遊ぶ日で、いつもは楽しみなんだけども何故か今日はいやな予感がする。

そんないやな予感を感じながらも本山に付き、早速庭で遊んでいる木乃香ちゃんと刹那ちゃんの所へ向かった。

いつも遊んでいる庭に付くと、木乃香ちゃん達は庭の近くの縁側に座つてお手玉をしていた。

「あー、しょーくんやー、しょーくんー、はやく」ひたひたきてあそぼーー！」

一早く僕の存在に気づいた木乃香ちゃんは早く遊びたいのか大声で呼んだ。

僕も早く2人と遊びたいので駆け足で2人の近くへいった。

「おはよう木乃香ちゃん、刹那ちゃん

「おはようー、しょーくんー！」

「おはよう御座こますしょーくん！」

「わつあまでお手玉してたの？」

「わつやでー、しょーくんがくるまで、おでだましてな、いまからなこすなかきめるんやー！」

「「これからか~」

木乃香ちゃんの言葉で考える。

初めての会ってから色々な遊びをした。鬼<sup>ゴ</sup>り<sup>リ</sup>、隠れん坊、色々坊や、蹴鞠など色々な遊びをした。

(ん~どんな遊びが良いかな~)

じ~~~~~

(ん~) 「どうしたの木乃香ちゃん?」

「いやな、しょーくんて、よくみたら、女の子みたいな顔、して  
るねわってな」

木乃香ちゃんが僕の顔をじ~と見つめるので、聞いて見たら女子の子  
みたいな顔と言った。

「ほんとやーしょーくんて女子みたいな顔や!」

木乃香ちゃんの言葉で興味を持ったのか刹那ちゃんが顔を見て木乃  
香ちゃんに同意した。

「 . . . . . わたやーこことおもこついた!」

木乃香ちゃんが少し唸っていたが、何か閃いたらしく手を叩いた。

「「おもこついた!」」

「うふーしょーくんに女子の子の格好せたらかわいいよとおもつよ

「

僕と刹那ちゃんの声に答える様に木乃香ひやんは満面の笑みで爆弾発言をした。

「えー・ひびき・木乃香ひやん[冗談だよねー]

「じゅうだんにわくよー、むりかせー・じゅうくをかくほやーーー！」

「せーせーーー！」

ダッ！

回れ右をして逃走する音

ガシッ！

刹那ちやんと木乃香ひやんにつかまれる音

「じょいへいこーじげるなんこやわーーー！」

「ちよつーのかちやんちよつと待つてー・僕男だからー・刹那ちゃんも何とか言つてー！」

「だいじゅうびんやー・じゅうくをかわえんでー！」

「うんじゅうく、今のこのやんせウチでは止められへんよ」

僕の抗議の言葉に木乃香ちゃんは聞く耳を持つておらず、刹那ちゃんは助けられないと言われた。

「さつそくお着替えをしようへりせつせひんも手伝つてー。」

「ひ、うん」

「ちょ、ちょと待つて！情けを、情けを～！」

結局木乃香ちゃんと刹那ちゃんに連れていかれ、女装するめになつた。

「～おまけ～

「父様～」

「どうしたんだい木乃香？」

「あのな、ほら隠れどらんど」

「あーちよつー。」

父さんと詠春様に見られない様に木乃香ちゃんの後ろに隠れていたが木乃香ちゃんに2人の前に押し出された。

「これは、これは、可愛い子ですね」

「ああ、でも翔はどうした？此処にはいない様だが？」

「なに言つてゐるんや〜」の子がしゃべへんやで

「なつ〜しょ、翔なのか〜」

「うわあ〜〜ん、父さんのバカ〜〜〜！」

「翔！待つてくれ！翔〜〜！」

## 外伝 北斗が来る前の話（後書き）

この前色々と調べていたら何と！感想を書いてくれた人に返信出来る事に気きました！（何で今まで知らなかつたんだよ自分！）なので感想に一つ一つ答えて行きたいので感想お待ちしております。次の話で木乃香の溺れた話を書こうと思います。

では次回もお楽しみに

## 第11話 溺れてそれから・・・（前書き）

今回も文章が雑だと思いますが楽しんで見て下さい。

## 第1-1話 溺れてそれから・・・

木乃香ちやんと刹那ちやんが溺れた。

毎過ぎの修行の休憩中に父さんから伝えられた。

「…………なつー父さん！その話は本当ですかー木乃香ちやんと刹那ちやんは無事なんですかー」

最初は何を言つたのか理解できなくて、少し硬直した後に父さんに詰め寄つた。

「…………ああ、幸い命に別状はないらしー」

「…………そうですか…………父さん、明日は木乃香ちやんと刹那ちやんの様子を見に行つてもいいですか？」

一刻も早く木乃香ちやんと刹那ちやんの様子が見たくて明日本山に行つてもいいか父さんに聞いた。

「ああ、明日の朝早くに出発にしよう！」

父さんは僕の気持ちが分かつたのか、朝早くに家を出ると言つた。

~~~~~

次の日、いつもは朝は修行時間だが、今日は朝の修行わしないで本山へ向かつた。

そして本山に付くとすぐには木乃香ちやんと刹那ちやんの所へ行つた。

ダン！

「木乃香ちゃん！刹那ちゃん！大丈夫！」

「あー、じょひくわおはよっ」

ズテン！

木乃香ちゃんの名前を叫びながらおもいつきつ襖を開けた先に居たのは、こつちを振り返り元気に挨拶する木乃香ちゃんだつた。自分が考えていた事と全然違い思わずすっこけてしまつた。

「イテテ……木乃香ちゃん無事だつたんだ……。
まあ木乃香ちゃんが無事だつた事はわかつたよ……。とい
うで刹那ちゃんはびうしたの？」

「…………せつちゃんな、剣の稽古で、今日は道場の方に居る
らしくんよ…………」

刹那ちゃんに断られた時を思い出したのか、木乃香ちゃんは少し寂
しそうに言つた。

「…………まあ、一日くらご遊べない日もあるよ、刹那ちゃん
もこれからずっと遊べなくなる事なんか無い筈だから」

流石にこの暗い空氣で遊んでも楽しく無いので、木乃香ちゃんを励
ました。

「…………やうやねーきよひはむりだつただけやな！」

「やうだよ木乃香ちゃん、今日は刹那ちゃんの分まで遊ぶから、ね

「…」

「うそ…………ほなさうそく遊ぼうしょーくん、めあはしょーくんに着物を着せないとあかんな」

「えつー木乃香ちゃん遊ぶのは良いけど、何で着物に着替えないといけないの…」

「え～せつねやんがいない分しょーくんで遊ぼうと思つたんよ～、前のしょーくんとってもかわえかつたえ～」

「こやこやいや、僕は男だよー女の子の格好をするのはおかしいよー」

「え～しょーくんわつせつねやんの分まで遊ぶつて言つのは嘘やつたんか?」

「いや、遊ぶつて言つたけど、女の子の格好をするつて言つてないし…」

「嘘やつたん?」

「…………喜んで着替えます」

木乃香ちゃんが少し涙目になり罪悪感がひしひしと伝わってきて結局女装するはめに。

その後は女装したまま帰るまで遊んだ。

第11話 溺れてそれから・・・（後書き）

この小説の投稿スピードを大体周一にして行きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3560p/>

魔法先生ネギま！～屍の主～

2011年5月14日23時26分発行